

DEREK PRINCE
MINISTRIES INTERNATIONAL

メッセージ

感謝、賛美と礼拝 感謝



メッセージ
著者 デレク・プリンス

最初に、「感謝」というテーマでお話しします。多くの人々が、祈りとは単に神に何かをお願いすること、いわば、買い物リストのようなものを持って神の前に出るようなものだという印象を抱いています。それは祈りに対する非常に限定的で不十分な見方です。祈りとは、単に一つの楽器が演奏する独奏のようなものではなく、オーケストラのようなものです。そのオーケストラには様々な楽器があります。今日は、そのうちの３つの楽器、「感謝」、「賛美」、「礼拝」についてお話しします。

この三つはすべて、祈りにおいて欠かせない部分です。もしあなたが普段、祈りのリストを持って神のところに行っていて、感謝、賛美、礼拝をそのリストと結びつける方法を学んでいないなら、何度神の前に行っても、願っているものを得られずに戻ってくることが多いのではないでしょうか。なぜなら、神は、私たちが神に近づくための一定の条件を定めておられるからです。最初に言っておきますが、感謝と賛美なしに、神への臨在の中に入り、神に近づく道はありません。神はそれを絶対的な条件として定められています。

数年前、私と同年代で、私よりも信仰生活が長い年配のクリスチャンと話していました。彼はキリスト教会ではよく知られており、私も非常に尊敬している人です。彼は、私が感謝と賛美なしに神に近づくことはできないと言っているのを聞いて、「私はクリスチャンになって以来、そんなことは聞いたことがない」と言いました。そして、それは彼の祈りの人生に革命をもたらしました。

ですから今日、実りある充実した祈りの生活を願うあなたにとって、大変重要なことをお話しします。

感謝、賛美、礼拝の３つを区別するヒントを教えましょう。この３つはそれぞれ神に近づき、神とつながる方法です。しかし、それらは異なる側面で神と私たちをつなぎます。これは非常に単純化されているので、例外もあると思いますが、取り上げる価値はあります。「感謝」によって、私たちは神の素晴らしさを認めます。「賛美」によって、私たちは神の偉大さを認めます。そして、「礼拝」によって、私たちは神の聖さを認めるのです。ですから、感謝は私たちを神の素晴らしさと結びつけ、賛美は私たちを神の偉大さと結びつけます。そして、人間のたましいの最高の活動である礼拝は、私たちを神の聖さと結びつけます。

このセッションの残りの時間は、感謝というテーマでお話しします。ヘブル 12:28 を読みましょう。

> 「こういうわけで、私たちは揺り動かされない御国を受けているのですから、感謝しようでは

© 1989 - デレク・プリンス・ミニストリーズ・インターナショナル・インク

ありませんか。こうして私たちは、慎みと恐れとをもって、神に喜ばれるように奉仕をすることができるのです。」

「感謝しようではありませんか」というのは、ギリシャ語では「恵みを持つ」という意味の charis(カリス)で、それは、「ありがとう」と言うことです。現代ギリシャ語で「ありがとう」は「a-har-isto」で、恵みのcharis に直接関係しています。つまり、恵みと感謝は直結しているということです。感謝しない人は、神の恵みから外れている人です。感謝しない人は、神の恵みにあずかることはできません。

これを顕著に表している 3 つの言語があります。まず、フランス語の graceです。Grace a Dieu(グラス・アデュー)は、「神への感謝」という意味です。それはまさに、「恵み」という言葉で、英語の綴りとまったく同じです。次に、イタリア語の grazie(グラッツェ)「ありがとう」は、graceと直接関係する語です。そして、スペイン語のgracias(グラシアス)です。ですから、この 3 つのラテン語をベースにしたロマンス語は、すべて恵みと感謝の直接結びついていることがわかります。私が強調したいこと、私たち全員にとって非常に重要なことは、私たちが感謝しないとき、私たちは神の恵みの外にあるということです。神の恵みの中にいて、感謝しないでいることはできません。感謝することと神の恵みを切り離すことはできません。

ですから、「感謝しましょう」と言ったり、「恵みを持ちましょう」と言ったりできます。そして、私たちは同じことを言っています。感謝なしには恵みを持つことはできません。

私と一緒にそれを言いましょう。それを強調したいからです。私が一度言いますので、後について言ってください。「感謝することなく、恵みにあずかることはできません。」 アーメン、神をほめたたえます。

では、おもにパウロの書簡から感謝に関する記述をいくつか見てみましょう。4 つの書簡を見ます。コロサイ人への手紙 3:15-17 から始めましょう。

「キリストの平和が、あなたがたの心を支配するようにしなさい。そのためにこそあなたがたも召されて一体となったのです。また、感謝の心を持つ人になりなさい。」

これは提案ではなく、命令です。「感謝の心を持つ人になりなさい」です。パウロはこう続けています。

「キリストのことばを、あなたがたのうちに豊かに住まわせ、知恵を尽くして互いに教え、互いに戒め、詩と賛美と霊の歌とにより、感謝にあふれて心から神に向かって歌いなさい。あなたがたのすることは、ことばによると行いによるとを問わず、すべて主イエスの名によってなし、主によって父なる神に感謝しなさい。」

このように、私たちは神に感謝をささげずに、何かをすることは決して許されないのです。私たちは、すべて、「イエスの御名によって」、「主によって神に感謝すること」という二つの方法によって行わなければなりません。そして、これは実に素晴らしい境界線を設定します。時々、若い人たちが娯楽の場に行く機会があるときに、「私はこれをしてもいいでしょうか」と私に聞きに来ます。私はこう答えます。「もしあなたがそこに行って、主イエスの御名によってそれを行ない、神に感謝をささげることができるなら、大丈夫です。もし、それができないのなら、良くありません。」それは、私たちが自由に行うことの制限を設けているのです。言葉においても、行動においても、すべて主イエスの御名によって行い、主に感謝をささげるのです。つまり、感謝はオプションではなく、必須なのです。

それから、エペソ 5:18 でパウロは、聖霊に満たされ続ける意味について語っています。

「また、酒に酔ってはいけません。そこには放蕩があるからです。御霊に満たされなさい。」

教会は、どれほど否定的なことに焦点を当て、肯定的なことを無視してきたことでしょう。つまり、酒に酔ってはいけないことは誰でも知っていますが、聖霊に満たされなければならないことを知っている人は、どれだけいるでしょうか。聖霊に満たされるとどうなりますか。次の節で教えています。

「詩と賛美と霊の歌とをもって、互いに語り、主に向かって、心から歌い、また賛美しなさい。いつでも、すべてのことについて、私たちの主イエス・キリストの名によって父なる神に感謝しなさい。」

もう一度言います。あなたが聖霊に満たされると、神に感謝を捧げ続けるようになります。あなたがどれくらい聖霊に満たされているかは、神に感謝を捧げる時間をどれくらい費やしているかによって、量ることができます。なぜなら、神に感謝を捧げることをやめるとき、聖霊が漏れ始めています。これは確かな目安の一つです。

また、Iテサロニケ 5:16-18 の、新約聖書の中でも最も短い節の部分でもありますが、それは非常に多くのことを語っています。

「いつも喜んでいなさい。」

© 1989 - デレク・プリンス・ミニストリーズ・インターナショナル・インク

非常にシンプルですが、それを実行するにはもっと恵みが必要です。

> 「絶えず祈りなさい。」

祈ることを決してやめてはいけません。つまり、ずっと祈っていなければならないのではありませんが、「祈り終わった」と言ってはいけないのです。スミス・ウィグルスワースの言ったことだと思いますが、彼は一度に 30 分以上祈ることはなかったが、祈らない時間が30 分以上続いたことはなかったということです。それは、絶えず祈ることの意味をよく表しています。

そして、その聖書箇所で言われている3つ目の条件です。

> 「すべての事について、感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられることです。」

キリスト・イエスにあって、神が望んでおられることは何ですか。すべてのことについて感謝することです。ですから、もしあなたが感謝を捧げていないなら、あなたは神のみこころから外れているということです。ふさわしい場所で正しい働きをしているのに、自分は神のみこころから外れていると感じている多くのクリスチャンの働き人に出会いました。問題なのは、場所や働きではなく、感謝し続けることをやめてしまったからなのです。ですから、感謝することをやめた瞬間、あなたは神のみこころから外れてしまうということを忘れないで下さい。何をするかではなく、神に応答していないことが問題なのです。

そして、ピリピ 4:6 にはこう書かれています。

> 「何も思い煩わないで、あらゆる場合に、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。」

感謝することなく、神に願いを持って行ってはいけません。

かなり前のことですが、私はジョン・ウェスレーの記事に非常に感銘を受けました。この聖句に対する彼のコメントをいつも思い出します。「あらゆる場合に祈りと願いによって」というフレーズから、ウエスレーは、「神は祈りによってすべてを行い、祈りなしには何も行わないと確信している」と言いました。それは実に基本的な真理であると思います。

パウロはここで、「感謝なしに神に願い事を持って行ってはいけない。どんな願いでも、感謝とともに持って行きなさい」言っています。

そして、すでに触れましたが、神に近づくことについて考えてみましょう。詩篇 100 篇は、非常に美しい有名な詩篇です。神の家に入ること、神に近づくことについて、4 節にこう書かれています。

> 「感謝しつつ、主の門に、賛美しつつ、その大庭に、入れ。主に感謝し、御名をほめたたえよ。」

神へのアクセスには 2 つの段階があることに注目しましょう。最初は門で、次に大庭です。門は大庭に入る許可を与え、大庭から実際の神の家に入ることができます。しかし、あなたは、「感謝しつつ、主の門に、賛美しつつその大庭に」という決められたルートでしか、そこに入ることはできません。神へ近づく最初のステップは感謝で、次に賛美です。私は人が感謝と賛美を伴った所定の方法で来ることのない限り、神の近くへ行く道はないことをまったく確信しています。みなさんの中には、時々祈っているときに、神を遠くに感じている人がいるかもしれません。その理由はおそらく、所定のルートを通って来ていないからでしょう。大庭の外に立って、神に叫べば、神はあなたの声を聞いて憐れんでくださるでしょう。しかし、あなたが感謝と賛美を携えて来なければ、神に近づくことはできません。神はそのように定めておられ、それを変えることはありません。

このように言う人がいるかもしれません。「私には神に感謝することは何もありません。なぜ神に感謝しなければいけないのですか。何もかもうまくいかないし、私の人生はめちゃくちゃです。なぜ神に感謝しなければいけないのですか。」詩篇の作者は5 節で 3 つの答えを与えています。4 節後半から読みます。

> 「主に感謝し、御名をほめたたえよ。主はいつくしみ深くその恵みはとこしえまで、その真実は代々に至る。」

この 3 つは不変です。あなたがどう感じようと、どんな状況であろうと、主は常にいつくしみ深く、主の恵みは永遠で、その真実は代々に至ります。つまり、神に感謝をする永久不変の 3 つの理由があるのです。自分の感情や状況にフォーカスするのではなく、これらの永遠で変わることのない神の御性質と神の私たちへの対処にフォーカスしてください。そうすれば、あなたは絶えず神に感謝する人となるでしょう。私たちはみな、神に感謝すべき多くのものがあるのに、感謝しないことは恥ずべきことです。

次に、ルカ 17 章でイエスに会った 10 人のらい病人(ツァラアト)の話があります。らい病人は汚れた存在とされていたので、誰に近づくことも許されていませんでした。その病気が伝染しやすかったため、自分たちが通る時には、「汚れている、汚れている!」と叫び続けてみんなに警告しなければならなかったのです。しかし、彼らは遠くから声を張り上げてイエスに叫びました。「イエスさま、先生、どうぞあわれんでください。」すると、イエスは彼らにとても簡単に答えました。「行って、自分を祭司に見せなさい。」さて、らい病から癒された人、きよめられた人は、自分を祭司に見せ、もう感染していないという証明をもらわなければなりませんでした。つまり、イエスが彼らに

© 1989 - デレク・プリンス・ミニストリーズ・インターナショナル・インク

そう言ったのは、「行く途中であなたはいやされる。そこに着くまでに、祭司はあなたがもうらい病ではないことを証明してくれるだろう」という意味だったのです。それが信仰です。時に、私たちは行く途中で癒されることがあります。もし、じっとして、何も起こらないと言うならば、何も起こらないのです。

そして、十人全員がらい病からきよめられました。しかし、戻って来てイエスに感謝を捧げたのは、ユダヤ人ではなく、一人のサマリヤ人だけでした。そして、彼はひれ伏してイエスに感謝したのです。イエスは言われました。「十人きよめられたのではないか。九人はどこにいるのか。神をあがめるために戻って来た者は、この外国人のほかには、だれもいないのか。」それからその人に、「立ち上がって、行きなさい。あなたの信仰が、あなたを直したのです」と言いました。「あなたを直した」は、ギリシャ語では「あなたを救った」です。この言葉は非常に重要で、英語や日本語の訳では明確ではありません。彼ら全員人 10 人全員がきよめられました。しかし、感謝を捧げるために戻って来た一人だけが救われたのです。彼らはみな、肉体の癒しを受けましたが、救いという永遠の霊的癒やしを受けたのは、戻って来て感謝した一人だけでした。そして、彼だけがイエスの近くに来たのでした。ですから、感謝を捧げなければ、私たちは神に近づくことができないのです。

それから、感謝についてのもう一つの非常に重要な事実は、感謝は、神の超自然の奇跡の力を解放するカギであるということです。とても分かりやすい例を一つ挙げましょう。五千人を養ったヨハネ 6 章の出来事です。イエスの目の前には、お腹を空かせた五千人の群衆がいました。その時、イエスが手にしたのは、少年のお弁当である 5 つのパンと2匹の魚だけでした。しかし、イエスは言われました。「人々を座らせなさい。私たちが彼らに食事を与えるのです。」ヨハネ 6:11 です。

> 「そこで、イエスはパンを取り、感謝をささげてから、すわっている人々に分けてやられた。また、小さい魚も同じようにして、彼らにほしいだけ分けられた。そして、彼らが十分食べたとき、弟子たちに言われた。『余ったパン切れを、一つもむだに捨てないように集めなさい。』」

イエスは祈ったのではありません。神に何かを求めたのでもありません。イエスはただ、自分の手の中にあるものを神に感謝しただけです。そして、ヨハネはそのことに非常に感銘を受けたに違いありません。なぜなら、次の 23 節で、数隻の小舟が来たことを次のように書いています。

> 「しかし、主が感謝をささげられてから、人々がパンを食べた場所の近くに、テベリヤから数隻の小舟が来た。」

ヨハネは、奇跡は長い祈りによってではなく、単純に感謝を捧げたことによって解放されたということをはっきりと知ったのでした。そして、私たちは感謝を捧げることによって奇跡を解放しないので、神の力を逃してしまうことが多いのではないかと思います。

ヨハネの福音書の11章で、イエスは埋葬されてから4日も経っていたラザロの墓の前に立っています。イエスは長い祈りをせず、ただこう言いました。「父よ、わたしの願いを聞いてくださったことを感謝いたします。」それだけです。そして、ラザロに向かって語ると、ラザロが出てきたのです。このように。神に感謝する習慣を身につけない限り、私たちは神の超自然の力の多くを見逃してしまうと私は思います。一般的に、長い祈りが神の力を解放するとは思えません。聖書の中の実に力強い祈りのほとんどは、とても短いのです。ミリアムが自分の兄弟を非難したためにらい病にかかったとき、モーセはミリアムのために祈りました。モーセは言いました。「神よ、どうか彼女をいやしてください。」それだけです。もし、私たちの願いを求めるときに、もっと感謝の気持ちをもって祈るなら、祈りは短くても効果的なものとなるでしょう。

では、この真理の反対側の暗い面、つまり感謝をしないことについて、聖書は何と言っているかを見る必要があります。私にとって非常に意義深い聖句を紹介します。ローマ人への手紙1章で、人類が神を知りながら、最も恐ろしい悪と罪深さに堕落したことを、パウロは見事な方法で述べています。ロー マ1章は人間の堕落と悲惨さ、悪について、聖書の中でも最も恐ろしいリストの一つで締めくくられています。どうして、人はそのようになってしまったのでしょうか。答えは、ローマ 1:21 にあります。

> 「それゆえ、彼らは神を知っていながら、その神を神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その無知な心は暗くなりました。」

これは、この章の最後の部分で、暗い穴の中へと落ちていく2つの堕落の段階です。その2つはどのような状態ですか。どちらも否定的です。神を神としてあがめず、感謝もしないのです。私たちが感謝することをやめるたびに、下降していく、滑りやすい道を歩み始めているのです。それはとても危険なことです。その道に足を踏み入れてはいけません。それは引き返して歩み直すことが難しい道だからです。

また、IIテモテ 3 章には、もう一つの恐ろしいリストがあります。ローマ1章とIIテモテ3章を比較してみてください。ローマ1章は論理的な結果、IIテモテ3章は歴史的な結果です。この時代の終わりの日には、人類はどのようになりますか。IIテモテ3:1から見てみましょう。

© 1989 - デレク・プリンス・ミニストリーズ・インターナショナル・インク

「終わりの日には困難な時代がやって来ることをよく承知しておきなさい。」

困難な時代は何をもたらしますか。人間の性質の堕落です。

「そのときに人々は、自分を愛する者、金を愛する者、大言壮語する者、不遜な者、神をけがす者、両親に従わない者、感謝することを知らない者、汚れた者になり...」

「感謝することを知らない者」はこのリストのどこにありますか。汚れた者の前に書かれています。感謝しないことは汚れた者なのです。感謝しなければ、聖なる者になることができません。もしあなたが感謝を捧げるなら、聖なる者となるための大きな一歩となります。

感謝することの反対は何ですか。それはどのような行いですか。様々な言い方がありますが、聖書の言葉では「つぶやき」です。あるいは、分かりやすく言えば、不平不満を言うことです。基本的に、あなたが何かを言うとき、その言葉は肯定的か、否定的かのどちらかです。中立的な言葉はほとんどありません。ですから、もし私たちが感謝しないなら、私たちはほぼ間違いなく、つぶやいたり、不平を言ったりしてしまうでしょう。日常的に不平を漏らすことの多い人はいますか。それは、みじめであることはお分かりだと思います。そのような人にならないでください。

Iコリント 10:10 でパウロが言っていることを見てみましょう。イスラエルがエジプトを出た後に陥った同じ間違いに陥らないようにと、パウロはクリスチャンに対して警告しています。こう書いてあります。

「あなたがたは、彼らの中のある人たちにならって、偶像崇拝者となってはいけません(7 節)。また、私たちは、彼らのある人たちが姦淫をしたのにならって姦淫をすることはないようにしましょう(8 節)。主を試みることはないようにしましょう(9 節)。また、彼らの中のある人たちがつぶやいたのにならってつぶやいてはいけません。彼らは滅ぼす者に滅ぼされました(10 節)。」

このような例はたくさんありますが、民数記 21 章を見ると、イスラエルは長く疲れる旅のゆえに、落胆し、いらいらしています。彼らは神とモーセに対してつぶやき始めました。神は彼らの中に燃える蛇を送り、それらの蛇は民にかみつき、彼らは死に始めました。つまり、つぶやくと、燃える蛇にさらされてしまうことになるのです。必ずしも実際の蛇というわけではなく、感謝しないことによって、あらゆる毒的なものが、あなたの中に入って来るのです。

ですから、私たちは感謝するか、不平を漏らすかという正反対の可能性に直面しています。感謝することを決心してください。感謝する理由を聖書から見つけ、いつも神に感謝すると決心してください。

賛美

感謝、賛美、礼拝という人間の3つの霊的活動は、神の性質の3つの側面に触れるものであることをお話ししました。感謝によって、私たちは神の素晴らしさ、すなわち神が私たちのためにしてくださるすべてのものは良いものであることを知ります。賛美によって、私たちは神の偉大さを認めます。それは、神の圧倒されるほどの権威に対する私たちのふさわしい反応です。そして、礼拝によって、私たちは神の聖さを認めます。

次に、賛美に焦点を当てましょう。神の偉大さを認めるということを踏まえて、詩篇 48:1 で始めたいと思います。

「主は大いなる方。大いにほめたたえられるべき方。その聖なる山、われらの神の都において。」

神の偉大さを認めることイコール神を大いに賛美することです。言い換えれば、私たちの賛美は神の偉大さに比例するものでなければなりません。それほど計り知れないものでなければならないのです。

そして、詩篇 100 篇の感謝について語りましたが、感謝とは、私たちが神に近づく最初のステップであると言いました。賛美は第二段階です。感謝を経て、賛美に進みます。感謝と賛美はどちらも非常に重要な心理的効果があると言わせてください。私たちがとても厄介で難しい願い事を神に持って行くとき、神がすでにしてくださったすべてのことに感謝すればするほど、次に神に祈り願うときに神を信頼しやすくなります。しかし、もし感謝をもって神のもとへ行かないなら、私たちの信仰は成長しません。では、詩篇 100 篇4-5節をもう一度見てみましょう。

「感謝しつつ、主の門に、賛美しつつ、その大庭に、入れ。主に感謝し、御名をほめたたえよ。 主はいつくしみ深くその恵みはとこしえまで、その真実は代々に至る。」

今、あなたの聖書を開いて、信仰の行いとして一緒にその部分を言いましょう。

「主はいつくしみ深くその恵みはとこしえまで、その真実は代々に至る。」「主よ、感謝しま

© 1989 - デレク・プリンス・ミニストリーズ・インターナショナル・インク

す。」

これがこの学びの適用です。では、イザヤ 60 章から、もう一つの美しい描写を紹介しましょう。イザヤ 60:18 です。これは神の都、つまり私たちが救いとイエスの血潮によって入る権利を持っている都について述べています。この箇所には、この都の素晴らしさが描かれています。

さて、イザヤ書60章にあるもう一つの美しい描写を皆さんに紹介したいと思います。これはイザヤ書の後半にある栄光に満ちた箇所の一つです。イザヤ書60章18節です。これは神の都、私たちが救いとイエスの血によってアクセスする権利を持つ都の描写です。この都市の非常に美しい描写がイザヤ書60章18節にあります。

「あなたの国の中の暴虐、あなたの領土のうちの破壊と破滅は、もう聞かれない。

私たちには、暴虐と破壊が遠くからかすかに聞こえますが、神の臨在の中には、暴虐と破壊はありません。私たちはどのようにして、そこへたどり着けるのでしょうか。

「あなたは、あなたの城壁を救いと呼び、あなたの門を賛美と呼ぼう。」

神の臨在を囲むその城壁は「救い」です。しかし、すべての門には賛美という名がついています。つまり、あなたがその城壁の中に入りたいなら、賛美の門を通らなければなりません。賛美がなければ入れません。それが、神の臨在の中に入る唯一の道なのです。

このセッションの残りの時間で、賛美についての7つの聖書的事実についてお話しします。他にもたくさんありますが、この7つは重要で、あなたの信仰を建て上げるのに役立つでしょう。まず、主に向かって言っている言葉、詩篇 22:3を開きましょう。

「けれども、あなたは聖であられ、イスラエルの賛美を住まいとしておられます。」

この「住まいとして」は、ヘブル語では、「座って」という意味もあります。実は、イスラエルでどこに住んでいるかと聞かれたら、私はヘブル語で「エルサレムに座っています」と答えていました。それがヘブル語の「住む」という意味になるからです。ですから、「あなたは聖であられ、イスラエルの賛美を住まいとしておられます」というのは、まったく正しいのですが、「あなたはイスラエルの賛美の上に座っておられます」という意味でもあるのです。神が座っておられるのはどのようなところでしょうか。王座です。ですから、「あなたは聖であられ、イスラエルの賛美の王座におられる聖なるお方です」と訳している聖書もあります。「イエス、わが王を賛美で迎えん。栄光の主の御座を設けたまえ主よ」という賛美があるように、王であるイエスに御座を設けることはふさわしいことです。しかし、神はとても恵み深い方で、それを命令してはいません。神は私たちのただ中に来てくださいますが、私たちが賛美の御座を神のための設けるまで、神の王権を認めることにはならないのです。

これからは、ともに集まって神を賛美するときに、イエスが王として座るのにふさわしい御座を設けることを思い描いてください。「あなたは、神の民の賛美に座しておられる聖なるお方です」と。

そしてもう一つ、詩篇 106:47 で、賛美は神が私たちを祝福する一つの主要な方法です。そして、それは、神の勝利の中に私たちを導き入れてくれるのです。ちなみに、「詩篇」は、ヘブル語では「te-he-leem」と言い、賛美という意味です。それが詩篇の書物のタイトルです。聖書の中で最も長い書物は詩篇です。ですから、ある意味、神の完全な啓示の主要な要素の一つは、神の賛美と言えます。あなたが神を賛美できない時、詩篇をたくさん読むことをお勧めします。一人でいる時にも、詩篇を声に出して読んでく ださい。「主よ、これは私の祈りです。私はこれをあなたに向かって読みます。詩篇の作者を通して聖霊によって与えられた祈りです。私はそれを読みます」と言って読んでみてください。そのうちに、賛美がもっと自然にできるようになると思います。賛美の習慣が身に着くのです。

とにかく、ここで詩篇の作者が言っていることを見てみましょう。詩篇 106:47 です。

「私たちの神、主よ。私たちをお救いください。国々から私たちを集めてください。あなたの聖なる御名に感謝し、あなたの誉れを勝ち誇るために。」

感謝、それから賛美、という同じ順序であることに気づきますか。私たちが神を賛美するとき、私たちは勝利の凱旋(パレード)をしているのです。古代ローマや古代世界の文化における凱旋(パレード)は、勝利を勝ち取るためではなく、すでに勝ち取った勝利の祝勝パレードでした。ですから、私たちが心から神を賛美するとき、勝利を求めているのではなく、勝利を祝っているのであり、私たちはそのパレードに加わるのです。パウロはIIコリント2:14で言っています。

「しかし、神に感謝します。神はいつでも、私たちを導いてキリストによる勝利の行列に加え、至る所で私たちを通して、キリストを知る知識のかおりを放ってくださいます。」

そう、勝利の行列とは、勝利した将軍が白い馬が率いる馬車でローマの町を練り歩き、道路沿いの人々はみな、その人を称えるものなのです。そして、彼が捕えた捕虜、倒したすべての敵

© 1989 - デレク・プリンス・ミニストリーズ・インターナショナル・インク

が彼の後ろに鎖で引かれていました。その様子を思い浮かべてください。私たちはどこにいますか。鎖で後ろにつながれているのではありません。道路沿いでたたえている群衆でもありません。では、どこにいるのでしょうか。馬車の中です。どのようにして馬車に乗ることができるのでしょうか。神を賛美することによってです。それが馬車に乗るためのステップです。

詩篇 30:11-12 のことばは、多くの箇所に引用されている意義深い箇所です。私は 13 年前に前妻を亡くし、それは私の人生にとって最もつらい経験でした。この節は、真実を語っていると思います。

> 「あなたは私のために、嘆きを踊りに変えてくださいました。あなたは私の荒布を解き、喜びを私に着せてくださいました。私のたましい(英語 NKJV では「誉れ」)があなたをほめ歌い、黙っていることがないために。私の神、主よ。私はとこしえまでも、あなたに感謝します。」

神が私たちの荒布を解き、嘆きから解放してくださるのは、目的があることに注目してください。その目的とは、私たちのたましいが神をほめ歌うようになるためです。また、詩篇 16:9 ではこう言っています。

> 「それゆえ、私の心は喜び、私のたましい(英語 NKJV では「誉れ」)は楽しんでいる。私の身もまた安らかに住まおう。」

ここでも、「私のたましい」(誉れ)となっています。多くの訳が異なる訳をしていますが、使徒の働き 2:26 で、使徒ペテロは、聖霊に促されて詩篇 16:9 を引用しています。しかし、ペテロはたましい(誉れ)を別の言葉を用いて解釈しています。使徒 2:26 です。

> 「それゆえ、私の心は楽しみ、私の舌は大いに喜んだ。さらに私の肉体も望みの中に安らう。」

あなたのたましい(誉れ)とは何ですか。あなたの舌です。なぜ、舌があなたのたましい(栄光)なのでしょうか。なぜ、神があなたに舌を与えたかご存知ですか。そう、神を賛美するためです。舌は、神を賛美する最高の部分です。それが私たちの喜び、誉れなのです。ある意味、神を賛美しない舌の使い方をすることは間違いなのです。神はあなたが神を賛美するために舌をあなたに置かれたからです。あなたが神を賛美するために舌を使うとき、それはあなたの誉れ、たましいとなるのです。

次に、イザヤ 61:3 を開きましょう。ここも、嘆き、絶望している人のためのメッセージです。何も前に、主がうつの霊から私を解放してくださったのは、この箇所を通してでした。

> 「シオンの悲しむ者たちに、灰の代わりに頭の飾りを、悲しみの代わりに喜びの油を、憂いの心の代わりに賛美の外套を着けさせるためである。」

「憂いの心の代わりに賛美の外套を」という箇所に注目してください。あなたが落ち込みたくない、暗い思いや悪い思いによってサタンに入って来られたくないなら、賛美の外套を着ければ、サタンはあなたに近づかないでしょう。

これに関する短い話を分かち合います。昔、私がロンドンのある地区で小さな教会の牧会をしていた時、奇跡的にソ連(ロシア)を脱出し、主に出会って聖霊に満たされたロシア系ユダヤ人姉妹がいました。彼女たちは私たち夫婦をよく訪ねてきて、一緒に祈っていました。彼女たちは西洋のペンテコステ派よりも大声を出すロシア系バプテスト派でした。つまり、彼女たちは主を賛美する術を知っていたのです。私たち4人は、主を賛美して過ごす素晴らしい時間を持っていました。そんなある日、教会の会員の女性が一人の男性を連れて来ました。彼女は、「これは私の夫です。彼は刑務所から出てきたばかりで、悪霊につかれています。夫のために祈ってもらえますか」と言いました。

当時、私は悪霊の取り扱いには疎く、悪霊をどう扱えばいいのかわからなかったので困惑しました。全くお手上げでした。私は、「私たちは今、祈っているところなのでお入りください」と言いました。何も思いつきませんでした。ですから、続けて大声で祈っていました。その男性はゆっくりと私のところに来て、「うるさくて嫌だ、私は帰らせてもらう」と言いました。神は私に答えを示されました。私はこう言いました。「聞いてください。私たちはイエスさまを賛美しています。悪魔はそれを嫌うのです。今、あなたには二つの選択肢があります。今、あなたが出て行くなら、悪魔はあなたと一緒に行きます。ここに残るなら、悪魔はあなたを離れて出て行きます。」彼は「残ります」と言いました。約 10 分後、彼は私のところに来て言いました。「悪魔は出て行きました。喉から出て行くのを感じました。」悪魔が私たちを困らせる以上に、賛美が悪魔を困らせることを証明してくれたその時のことを、私は決して忘れません。

ですから、あなたが落ち込んだり、ふさぎ込んだり、不幸に感じたりすることがあったら、憂いの心の代わりに賛美の外套を着けてください。それが効果的に働くということを体験したからです。

詩篇33:1で、詩人は言います。

> 「賛美は心の直ぐな人たちにふさわしい。」

それは、あなたの霊の美しい外套です。

© 1989 - デレク・プリンス・ミニストリーズ・インターナショナル・インク

また、エレミヤ 33:11 で、賛美、感謝のもう一つの側面を見ることができます。そこで使われていることばはどちらも重要です。これは神の民の回復と、エルサレムの通りで聞かれることについて語っています。これらの言葉をもとに作られたに美しいヘブル語の歌があります。

> 「楽しみの声と喜びの声、花婿の声と花嫁の声、『万軍の主に感謝せよ。主はまことにいつくしみ深く、その恵みはとこしえまで』と言って、主の宮に感謝のいけにえを携えて来る人たちの声が再び聞こえる。」

英語の NKJV 訳では、「賛美のいけにえ」と言っています。賛美がいけにえであることを理解することは重要です。賛美できない時があります。何らかの犠牲が伴い、いつも簡単に賛美できるとは限りません。そして、主を賛美する最も重要な時とは、最も賛美する気分になれないときなのです。自分の感情に左右されてはいけません。たとえ、あなたの感情にまったく反するときであっても、神のことばは、あなたに何をすべきかを教えてくれます。

ヘブル 13 章はこのことをはっきりと言っています。ヘブル 13:15-16 です。

> 「ですから、私たちはキリストを通して、賛美のいけにえ、すなわち御名をたたえるくちびるの果実を、神に絶えずささげようではありませんか。」

どれくらいの頻度で神を賛美するべきでしょうか。決してやめることなく、「絶えず」です。

> 「善を行うことと、持ち物を人に分けることとを怠ってはいけません。神はこのようないけにえを喜ばれるからです。」

つまり、賛美や感謝はいけにえなのです。そして、私たちが最も犠牲を持ってささげるとき、最も神に受け入れられるのです。すべてが私たちに不利な状況に思える時こそ、信仰を持って神を賛美するときです。それは犠牲です。

それから、詩篇 8:2 にあるように、賛美は霊的武器です。これは私の好きな聖句の一つで、何度もその箇所を思い起こします。私は長いメッセージをするときには、必ず詩篇 8:2 の励ましが必要なのです。

> 「あなたは幼子と乳飲み子たちの口によって、力を打ち建てられました。それは、あなたに敵対する者のため、敵と復讐する者とをしずめるためでした。」

つまり、神には敵がいます。それを知ることは重要です。そして神には、「敵と復讐する者」と呼ばれる敵がいます。それは誰ですか。サタンです。そして、サタンを黙らせる方法があると言っています。

何年か前、私はスイスのローザンヌでフランス語の通訳者を介してメッセージをしました。私はフランス語がわかるので、通訳者の訳を聞いていましたが、フランス語で敵を「しずめる」の部分を「神は悪魔に沈黙を課す」と言っていました。私はそれを決して忘れません。神は悪魔に沈黙を課すのです。「黙れ!」と。いつですか。神を賛美するときです。私たちの賛美は悪魔を黙らせます。なぜ悪魔を黙らせる必要があるのでしょうか。悪魔が四六時中、私たちを非難しているからです。「なぜ、神が悪魔を黙らせてくださらないのか」と思うかもしれません。神はこう答えます。「私はあなたにそのための武器を与えたからだ。」

さて、詩篇 8:2 で「あなたは力を打ち建てられました」とあります。しかし、新約聖書は旧約聖書の解説でもあります。マタイ 21:15-16 を開いてください。これは、イエスのエルサレムでの奉仕の最後の週のことです。

> 「ところが、祭司長、律法学者たちは、イエスのなさった驚くべきいろいろのことを見、また宮の中で子どもたちが『ダビデの子にホサナ』と言って叫んでいるのを見て腹を立てた。そしてイエスに言った。『あなたは、子どもたちが何と言っているか、お聞きですか。』イエスは言われた。『聞いています。『あなたは幼子と乳飲み子たちの口に賛美を用意された』とあるのを、あなたがたは読まなかったのですか。』」

詩篇の作者が「あなたは力を打ち建てられました」と言っているところを、イエスは「あなたは賛美を用意された」と言われました。どういうことでしょうか。神の民の力は、完全な賛美なのです。私たちがどんなに弱くても、その武器は無敵なのです。ですから、詩篇の作者は、最も弱い者である幼子と乳飲み子を例に挙げ、そのように弱い者であっても、神を賛美するとき、敵に沈黙を課すと言っているのです。悪魔を黙らせることができるということを知って、私は喜びにあふれています。

そして、聖書の事実のリストの7つ目は、賛美は神の超自然的な介入のための道を備えるということです。まず、詩篇 50 篇を見てみましょう。

この賛美のテーマで何度も詩篇を開いていますが、詩篇 50:23 です。神はこう言っています。

© 1989 - デレク・プリンス・ミニストリーズ・インターナショナル・インク

「感謝のいけにえをささげる人は、わたしをあがめよう。その道を正しくする人に、わたしは神の救いを見せよう。」

この「正しく」という単語は、翻訳者によって挿入されたものです。適切な翻訳はこうです。

「賛美のいけにえを捧げる人に、私は神の救いを見せる備えをする。」

その人は、自分の状況に来る救いの現れのための備えをします。

さて、その美しい例がいくつかあります。たとえば、II歴代誌20章で、ヨシャパテがユダの王であったとき、南東から大軍が進軍してきました。ヨシャパテは、その大軍に対抗できる人材や資源がないことを知っていました。しかし、彼は断食を布告し、神の民をユダの町から呼び集めました。彼らが断食して祈っていると、主はレビ人を通して預言を与え、何をすべきかを教えられました。神は、「ある場所に攻め下らなければならない。この戦いはあなたがたの戦いではない。主があなた方のために戦う」と言いました。そこで、ヨシャパテは民にこう言いました。「あなたがたの神、主を信じ、忠誠を示しなさい。その預言者を信じ、勝利を得なさい。」そうして、翌日彼らは出発し、このようなことが起こりました。II歴代誌20:21を読みましょう。

「それから、彼は民と相談し、主に向かって歌う者たち、聖なる飾り物を着けて賛美する者たちを任命した。彼らが武装した者の前に出て行って、こう歌うためであった。『主に感謝せよ。その恵みはとこしえまで。』」

同じ理由が再び出てきています。聞いてください。

「彼らが喜びの声、賛美の声をあげ始めたとき、主は伏兵を設けて、ユダに攻めて来たアモン人、モアブ人、セイル山の人々を襲わせたので、彼らは打ち負かされた。」

この話の続きを読むと、彼らは戦う必要はなく、軍事的な武器は一つも使う必要がありませんでした。賛美という武器が完全な勝利をもたらしたのです。そして、敵は互いに敵対し合い、殺し合いました。そして、ユダの人々が戦場に来てみると、敵はみな死んでいました。彼らは戦利品を手に入れるだけでよかったのです。なんと素晴らしい賛美の力の様子でしょうか。

では、哀れなヨナを見てみましょう。彼は問題の真っただ中にいます。ご存知の通り、彼は魚のお腹の中で祈っています。彼はかなり長い間祈り続けました。ヨナ2:2、3でヨナはこう言っています。

「私がよみの腹の中から叫ぶと、あなたは私の声を聞いてくださいました。あなたは私を海の真ん中の深みに投げ込まれました。」

そして彼は7節まで祈り続けましたが、何も起こりませんでした。8節を見ると、彼は神に感謝し始め、魚はそれ以上耐えられなくなりました。9節を読みましょう。

「しかし、私は、感謝の声をあげて、あなたにいけにえをささげ...」

まさに「いけにえ」と言っています。魚のお腹の中にいるとき、神に感謝を捧げ始めることには決意が必要です、しかし、それには価値がありました。そのことは報われたのです。

「私の誓いを果たしましょう。救いは主のものです。主は、魚に命じ、ヨナを陸地に吐き出させた。」

主は、いつ魚に命じましたか。ヨナが主に賛美と感謝をし始めたときです。

使徒の働きにおいても、パウロとシラスのミニストリーの中に、美しい例があります。パウロが占い師の女から悪霊を追い出し、解放したことで、その町中が騒動になりました。パウロとシラスは激しくむち打たれ、最も厳重な牢屋に入れられてしまいました。真夜中でした、私のクリスチャンの友人の一人は、パウロとシラスはその牢屋でこんな会話をすることもできたと言いました。シラスがパウロに、「どうして、君は解放の働きを始めたんだい?君が悪霊を追い出すまでは、すべてがうまくいっていたのに!」と。しかし、彼らはそうしませんでした。彼らがしたことを読んでみましょう。使徒16:25です。

「真夜中ごろ、パウロとシラスが神に祈りつつ賛美の歌を歌っていると、ほかの囚人たちも聞き入っていた。」

その牢屋にはそれまで、そのような人はいませんでした。

「ところが突然、大地震が起こって、獄舎の土台が揺れ動き、たちまちとびらが全部あいて、みなの鎖が解けてしまった。」

地震を起こしたのは何でしたか。そうです、人々の鎖を解いたのは超自然的な地震で、通常の地震ではありませんでした。何がその地震を引き起こしたのでしょう。そう、賛美です。つま

© 1989 - デレク・プリンス・ミニストリーズ・インターナショナル・インク

り、賛美を捧げる人は、神の救いを見るための道を備えるのです。

では、簡単なリストで締めくくりましょう。第一に、いつ神を賛美するか。その答えは、毎日、永遠に、いつも、絶えずです。疑いを取り去ります。

第二に、どのように神を賛美するか。心を尽くし、理解を深め、手を上げて、喜びの口と唇で、手を上げて。夕べのいけにえとして、踊りをもって、タンバリンとダンスで。みことばはそう言っています。

神を賛美するのは誰ですか。詩篇148篇で神を賛美する29種類の被造物がリストアップされています。そして、あなたにまだ確信がないなら、詩篇 150 篇に「すべての息のあるものはみな」と言っています。一人残らずです。

しかし、主を賛美しない人々のグループが一つだけあります。誰でしょうか。死人です。つまり、どういうことでしょうか。もし、あなたが主を賛美していないなら、あなた自身で診断できます。あなたは肉体的には死んでいませんが、霊的に死んでいるのです。

礼拝

感謝、賛美と礼拝。礼拝によって、私たちは神の聖さを認めます。礼拝は人間ができる最高の活動であると、私は信じています。賛美と感謝は、おもに言葉によるもので、口から出る私たちの言葉、歌、あるいは大きな声で賛美や感謝を表します。しかし、礼拝はおもに言葉によるものではありません。それに気づいている人は非常に少ないのですが、とても重要なことです。

私が知る限り、旧約のヘブル語、新約のギリシャ語のどちらも、聖書の言語で用いられている「礼拝」という言葉はすべて、体の姿勢を表しています。実に、礼拝は言葉によるものではなく、姿勢、態度なのです。もちろん、肉体の姿勢だけではなく、内面的な存在全体の姿勢、態度です。

聖書で礼拝特有の姿勢がいくつかあります。まず、頭を垂れることです。モーセが燃える柴で神に会い、神が民を救い出すという知らせを持って民のところへ戻り、長老たちにそのことを伝えた時、長老たちはみな、ひざまずいて礼拝したとあります。それは、言葉によるものではなく、姿勢でした。

そして、多くの場合、頭だけでなく、体の上半身をかがめます。そして、それに伴って手のひらを上に向かって伸ばしています。興味深いことに、ヘブル語の「ありがとう」は、「手」という言葉と直接関連しています。ヘブル語は非常に身体と結びついた言語で、抽象的ではなく、具体的な表現です。このように、「ありがとう」とは、手を伸ばすことなので、私たちが神に手を伸ばすとき、私たちは「ありがとう」と言っているのです。

また、私たちは手を上に伸ばして、神が私たちに与えようとしておられるものを受け取るのだと思います。

それから、ひざまずくことは、とても特徴的な礼拝の姿勢です。私は、このひざまずくという習慣を保持して礼拝をしている教会を評価します。私は英国国教会で育ったので、いつひざまずくのかというタイミングを知っていました。ひざまずくことは、礼拝の重要な部分であると私は思います。それを見落としている教派もあるように思います。私は集会で神が大きく働いてくださっていると感じた時に、会衆全員にひざまずくように提案したことがあります。そして、全員がひざまずいた姿勢で神の前にいたとき、最も力強い聖霊の訪れを経験したことがあります。もちろん、ひざまずくことがその意味をほとんど失った単なる宗教形式となりうることも分かっていましたが、だからと言って、神の前にひざまずく祝福を奪うことにはなりません。

そして、「礼拝」のおもな意味はまた、神の前にひれ伏すという意味もあります。聖書に登場する偉大な人物の中で、神の前に顔を地につけたことのない人はほとんどいないでしょう。これこそ、究極的な礼拝の行為と言えるかもしれません。

妻と私が説教の奉仕で旅に出るとき、たいていは自分自身を整えるようにしています。いつもではありませんが、神の前に床に顔をして祈ります。「神さま、私たちはすべてをあなたにゆだねます。あなたから来るのでなければ、私たちには与えるものも、力も、義も、知恵もありません」ということを認める時を持ちます。

私は、ジョン・バニヤンのこの言葉が好きで、心に刻んでいます。「下にいる者は落ちる心配をする必要がない。卑しい者は高ぶらず、謙遜な者には神を道しるべとする。」床にひれ伏すとき、それ以上低くなることはできません。それ以上落ちることを恐れる必要はありません。神の前にひれ伏すことは、安全な姿勢なのです。

預言者イザヤの書6章の最初の3節に、重要な原則を私たちに与えている天の礼拝の例を見たいと思います。ここは、イザヤが天での主の栄光の幻を見た場面です。この章は、私にとっていつも意義深い章です。というのも、私が初めてペンテコステの集会に行ったとき、それがペンテコステの集会であるとは知りませんでした。実際、ペンテコステ派という人々がいることも知りませんでした。しかし、初めて行ったときのメッセージがここの場面から語られたのです。当時、私はイギリス軍兵士で、他のイギリス軍兵士と同じような生活を送っていました。イザヤは栄光の主を見たとき、「ああ。私は、もうだめだ。私はくちびるの汚れた者で、くちびるの汚れた民の間に住んでいる」と言いました。私はまだ救われていなかったので、「私はくちびるの汚れた者で、くちびるの汚れた民の間に住んでいる」という言葉を聞いて、「このことば以上に正確に私を表現した人はこれまでにいない」と思いました。私はその言葉を聞いたあと、説教者のメッセージの内容はあまり理解できませんでしたが、耳を傾けました。

© 1989 - デレク・プリンス・ミニストリーズ・インターナショナル・インク

とにかく、最初の3節を読みましょう。

> 「ウジヤ王が死んだ年に、私は、高くあげられた王座に座しておられる主を見た。そのすそは神殿に満ち、セラフィムがその上に立っていた。」

セラフィムは、「火」を意味する言葉です。セラフィムは火のような生き物です。このように描写されています。

> 「彼らはそれぞれ六つの翼があり、おのおのその二つで顔をおおい、二つで両足をおおい、二つで飛んでおり、互いに呼びかわして言っていた。『聖なる、聖なる、聖なる、万軍の主。その栄光は全地に満つ。』」

私は、この3つの「聖なる」は、神格の三位一体の3つのためのものだとずっと信じてきました。聖なるかな「父」、聖なるかな「御子」、聖なるかな「御霊」だと。しかし、この光景を想像してみると、礼拝と賛美の素晴らしい関係についての概念を与えてくれると思います。賛美は言葉によります、ですから、セラフィムは主を賛美し、主の聖さを宣言しています。「聖なる、聖なる、聖なる主。」

しかし、イザヤが最初に見たのは、それではありませんでした。彼が最初に見たものは礼拝でした。セラフィムには6つの翼がありました。最初の2つで顔を覆い、次の2つで両足を覆っています。それは何でしょうか。それは姿勢です。礼拝の姿勢です。礼拝とは、神の前で敬虔な思いで顔を覆うことです。神の前に畏敬の念を抱いてからだを覆うことです。

それから、残りの2つの翼で飛ぶのです。飛ぶことを奉仕、顔と足を覆うことを礼拝として見るなら、その割合は、礼拝には4つの翼、奉仕には2つの翼となります。これは正しい割合だと私は思います。私たちは礼拝に奉仕の倍の時間と重点を置くべきであると信じます。

さらに、礼拝が奉仕よりも優先されるべきであると思います。礼拝でまず神とつながることなく、神の奉仕に携わるべきではありません。奉仕が常に礼拝から生まれる時、私たちの奉仕は全く違ったものになるでしょう。

一方、奉仕せずにただ礼拝することは偽善です。マタイ4:10 イエスの言葉を見てみましょう。サタンが自分をひれ伏して拝むようにとイエスに誘惑したときです。イエスは申命記から引用して答えました。

> イエスは言われた。「引き下がれ、サタン。『あなたの神である主を拝み、主にだけ仕えよ』と書いてある。

ここでも順番に注目してください。まず礼拝をし、次に仕えるのです。

このように、礼拝のあとには必ず奉仕が伴うべきです。これは重要なことで、大半の教会で礼拝がほとんど行われていなかった時代がありました。日曜日の朝に集まり、それを礼拝と呼びますが、実際には礼拝がありません。それは賛美や宣言はしていましたが、直接的な礼拝はありませんでした。

しかし、ここ数十年の間に、礼拝が教会に戻り始めました。ある意味、現在は礼拝をすることが流行と言えます。礼拝中心の教会もあります。そして自分たちの礼拝がいかに素晴らしいかを誇りにさえ思っているかもしれません。しかし、もし人々が礼拝を霊的な自己満足のためのものと捉え、それが奉仕に結びつかないのであれば、それは偽善なのです。日曜の朝に素晴らしい礼拝をして家に帰り、週の残りを自分自身のために生き、イエスのことばに耳を傾けないのです。「あなたの神である主を拝み、主にだけ仕えよ」この2つは決して切り離されてはいけません。奉仕は礼拝から切り離されてはいけないし、礼拝は奉仕から切り離されてはいけないのです。

さて、詩篇 95 篇に礼拝への進展を美しく描写している箇所があります。最初の2節は、大声での歓喜に満ちた賛美の描写です。こう言っています。

> 「さあ、主に向かって、喜び歌おう。われらの救いの岩に向かって、喜び叫ぼう。」

文字通り、「叫ぶ」のです。大声で歌うという意味ではなく、叫ぶという意味です。

> 「感謝の歌をもって、御前に進み行き、賛美の歌をもって、主に喜び叫ぼう。」

再び、感謝と賛美の二つの段階のアクセスに注目してください。以前に言ったことを思い出してください。神の臨在に入る方法は他にありません。

ここでも、近づくための2つの段階、感謝と賛美が見られます。先ほど言ったように、神の臨在に入るために、これ以外の道はありません。それから、次の3節は私たちが神を賛美し、感謝すべき理由を教えています。聖書は非常に論理的です。ただ神に感謝し、賛美をするように求めているだけではなく、その理由を教えています。詩篇 100 篇に3つの理由があったのを覚えていますか。主は「素晴らしく」、「主のあわれみはとこしえまで」、「主の真実は代々に続く」です。これらは、神を賛美する3つの不変の理由です。そして、詩篇 95:3-5 には、次のような理由が書かれています。

> 「主は大いなる神であり、すべての神々にまさって、大いなる王である。」

© 1989 - デレク・プリンス・ミニストリーズ・インターナショナル・インク

賛美によって、私たちは神の偉大さを認めると言ったことを覚えていますか。ここで、「大いなる」という言葉が2回使われています。主は大いなる神であり、すべての神々にまさって大いなる王である。 そして、私たちは叫び、歓喜、興奮する賛美によって神の偉大さを認めます。

そして、全能の創り主としての神を見るのです。

> 「地の深みは主の御手のうちにあり、山々の頂も主のものである。海は主のもの。主がそれを造られた。陸地も主の御手が造られた。」

私たちは神に感謝し、神の創造の素晴らしさをほめたたえるために神のもとへ来るのです。しかし、それは神の臨在への道に過ぎません。6節で礼拝に入ります。つまり、賛美と感謝は礼拝に入るための道であり、近づく方法なのです。そして、即座に礼拝に入る姿勢、態度になっていることに気づくでしょう。6-7 節。

そして、即座に礼拝に入る姿勢、態度になっていることに気づくでしょう。6-7 節。

> 「来たれ。私たちは伏し拝み、ひれ伏そう。私たちを造られた方、主の御前に、ひざまずこう。主は、私たちの神。」

私たちは口からの言葉から姿勢へと移ります。賛美と感謝で始めますが、それがゴールではありません。クリスチャンがただ賛美と感謝で止まってしまうと、神が持っておられるゴール、すなわち礼拝を見逃してしまいます。礼拝は言葉ではなく、姿勢・態度なのです。

> 「さあ、私たちは礼拝し、ひざまずこう。私たちは私たちの創造者である主の前にひざまずこう。[なぜなら？ 7節:]彼は私たちの神だからです…」

私たちはどのようにして、神を神として認めるのでしょうか。礼拝をすることによってです。礼拝は神のものだからです。ですから、私たちが神を礼拝するとき、まさにその行為によって、主が私たちの神であると認めているのです。

> 「私たちは、その牧場の民、その御手の羊である。」

ですから、神の民である私たちが神を礼拝することは適切なことなのです。それは、神の民である私たちと、私たちの創り主、贖い主なる神との関係を認めることなのです。

さて、聖書を開いてみると、この節がそこで終わってはいません。次の文の最初の部分が7節の終わりに含まれているので、奇妙な分割がなされているように思えます。こう書いています。

> 「きょう、もし御声を聞くなら、メリバでのときのように、荒野のマサでの日のように、あなたがたの心をかたくなにしてはならない。」

その「きょう、もし御声を聞くなら」という部分が、なぜ礼拝の部分に入れられているのでしょうか。それは素晴らしい奥義です。なぜなら、私たちが礼拝するとき、私たちはまさに神の声を聞くからです。礼拝するとき、私たちは話すことを止めます。叫び、賛美することはいいのですが、それで終わりではありません。ある意味での終わりは、あまり言葉を発することなく神の前に畏敬の念を持ち、静まる時です。

ある人が、カリスマ派は沈黙をとても恐れていると言いましたが、それは一理あると思います。しかし、沈黙の時は来ます。どのくらい静まるのでしょうか。神に 10 分をゆだねることができますか。ほとんどの教会は、10 分間の沈黙を持つなんて、とんでもないと思うでしょう。私は 10 分にこだわっているのではありません。その長さは神が決められると思います。そのような態度で神の声を聞くために自分を明け渡すのです。

妻と私は、ほぼ毎日、時間を取って神を賛美し礼拝します。私はあまり良い声ではないので、妻が賛美リーダーです。私たちが礼拝の態度で神の前に自分たちの霊を静めるとき、神が私たちに語ってくださったことが何度もあります。私たちは方向や警告、励ましを直接神から受けてきました。私は預言的な発言については非常に慎重です。必ずしも信じるわけではありません。しかし、一般的に、そのような礼拝の中で預言的な発言があり、その状況にふさわしいものであるなら、私はたいてい、神が神の民に語ってくださっていると信じることができます。しかしもし、私たちが礼拝の態度にないなら、神が私たちに語ってくださる機会を与えないことになるのです。

その進み方に注目してください。叫ぶ、歓喜、活気に満ちた賛美。それは私たちを神の臨在の中へと連れて行きます。私たちは先ほど述べたような理由によって神をほめたたえるのです。しかし、私たちが神の臨在の中に来るとき、それは変化します。もはや言葉ではなく、全能の神の臨在にふさわしい態度に代わるのです。そして、その態度の中で私たちは神の声に耳を傾けるために心を開きます。

では、新約聖書から礼拝についてのイエスのことばを見てみましょう。ヨハネ4章の良く知られている箇所です。イエスはヤコブの井戸でサマリヤの女と話しています。イエスは23節でこう言っています。

> 「しかし、真の礼拝者たちが霊とまことによって父を礼拝する時が来ます。今がその時です。

© 1989 - デレク・プリンス・ミニストリーズ・インターナショナル・インク

> 父はこのような人々を礼拝者として求めておられるからです。」

それから、イエスは次の節でこう続けています。

> 「神は霊であり、神を礼拝する者は霊と真実によって礼拝しなければならない。」

つまり、礼拝において、霊である神に直接結び付くのは、私たちの霊であると私は信じます。聖書によると、人間は霊、たましい、からだの3つの要素から成り立っています。賛美と感謝においては、私たちのたましいが活発に働きますが、礼拝の段階に来ると、私たちの霊が神の霊と直接交わります。そして、私たちは霊とまことによって神を礼拝しなければなりません。

聖霊なしでは、私たちは本当に礼拝することができません。聖霊に満たされた経験を持った方々は私の言うことを理解してくださると思います。それは、礼拝の仕方を変えます。新しい次元を持つことになります。それは私たちを完璧にしたり、他の人々より優れているということではありませんが、礼拝が何であるべきかを理解する能力を私たちの中に解放するものです。

また、「まことによって」と言っています。まことには誠実さが求められます。礼拝において誠実であることを学ぶことは非常に重要であると信じます。このことをレビ記から説明したいと思います。レビ記は旧約聖書の中で祭司のしきたりといけにえについて書かれた書物です。新約聖書のレビ記と呼べる書物はどれでしょうか。そう、ヘブル人への手紙です。

いけにえに関して、主はいけにえとして捧げて良いものと、捧げてはいけないものについて指示しています。1 節と 2 節で、神は乳香と呼ばれる特定の芳香性の樹脂がすべてのいけにえに添えてささげられなければならいと命じています。その個所、レビ記 2:1-2 を見てみましょう。

> 「人が主に穀物のささげ物をささげるときは、ささげ物は小麦粉でなければならない。その上に油をそそぎ、その上に乳香を添え、それを祭司であるアロンの子らのところに持って行きなさい。祭司はこの中から、ひとつかみの小麦粉と、油と、その乳香全部を取り出し、それを記念の部分として、祭壇の上で焼いて煙にしなさい。これは主へのなだめのかおりの火によるささげ物である。」

さて、捧げものには、様々なものがありました。小麦粉、油があります。それらは一部だけが焼かれましたが、乳香はすべて燃やされました。乳香は、旧約聖書では礼拝の一種です。そして、私たちが神に捧げるものもまた、神の働き人、祭司職の必要のためでもあります。しかし、神だけに捧げる捧げものの部分があります。それは乳香、すなわち礼拝です。いかなる時も人間という存在に礼拝をささげるのではなく、ただ主だけに礼拝を捧げるということを忘れてはなりません。

さて、乳香は木から採られる香りの樹脂の一種です。それを燃やすと、素晴らしい香りを放ちます。それ自体はあまり美しいものではありませんが、この素晴らしい香りを放つのです。それこそ、神が願っておられるもの、私たちの神への礼拝となるものです。神の鼻孔に上る美しく香ばしいかおりです。

一方、神のささげものとしておいてはならない物が一つあります。同じ章の 11 節を見てください。

> 「あなたがたが主にささげる穀物のささげ物はみな、パン種を入れて作ってはならない。パン種や蜜は、少しでも、主への火によるささげ物として焼いて煙にしてはならないからである。」

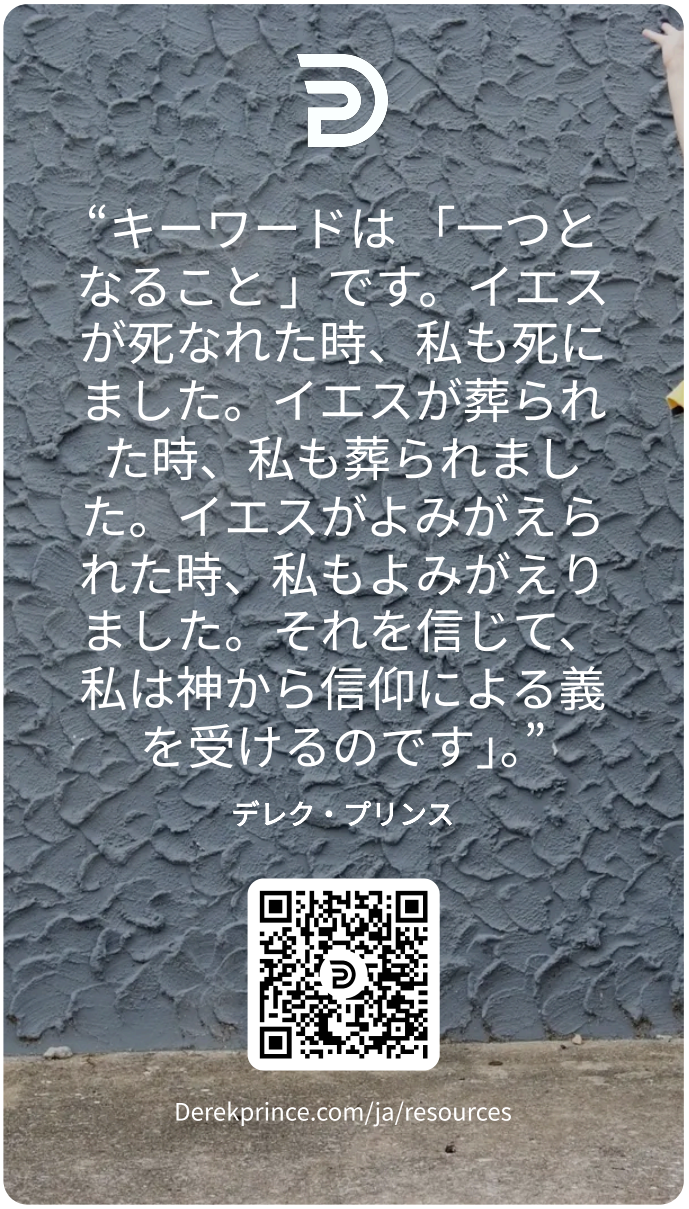
火に入る前の蜜は、甘くおいしいです。しかし、蜜は燃えると黒くなり、粘着性のある汚い物となります。主が言われているのは、「火に耐えられないような礼拝を捧げてはならない。乳香を捧げよ。それは火に焼かれるほど甘さが増す。しかし、あなたが試みられたときに、黒く粘着性のある汚い物になるような礼拝を捧げてはならない」ということです。そのことを考えてみてください。あなた自身に聞いてみてください。「私は祈りで蜜を捧げていないだろうか。それとも、私の祈りに乳香を添えているか。私は自分が行なっていないことを神に言っていないだろうか。それとも、霊とまことによって神に祈っているだろうか。」

最後に、礼拝の生き生きとした様子を見てみましょう。Iコリント6:16-17 です。聖書が率直的な本であるように、これは非常に率直な聖句です。パウロは言っています。

> 「遊女と交われば、一つからだになることを知らないのですか。『ふたりは一体となる』と言われているからです。しかし、主と交われば、一つ霊となるのです。」

その対比をしっかり理解しなければなりません。最初のたとえは、肉体的、性的、不道徳な結合です。そのあとでパウロは、霊において主と一つになることについて語っています。つまり、肉体的に一つになることと、霊において一つとなるという2種類があるのです。礼拝はどちらでしょうか。霊において一つとなります。礼拝は、私たちの霊が直接神と一つとなることができる唯一の方法なのです。そして、その一致から実が結ばれるのです。礼拝は私たちに霊的な生産を与えるものです。分かりますか。ですから、礼拝について考えるとき、あなたの霊が神と一つ霊になることについて考えてみてください。

© 1989 - デレク・プリンス・ミニストリーズ・インターナショナル・インク



© 1989 - デレク・プリンス・ミニストリーズ・インターナショナル・インク